

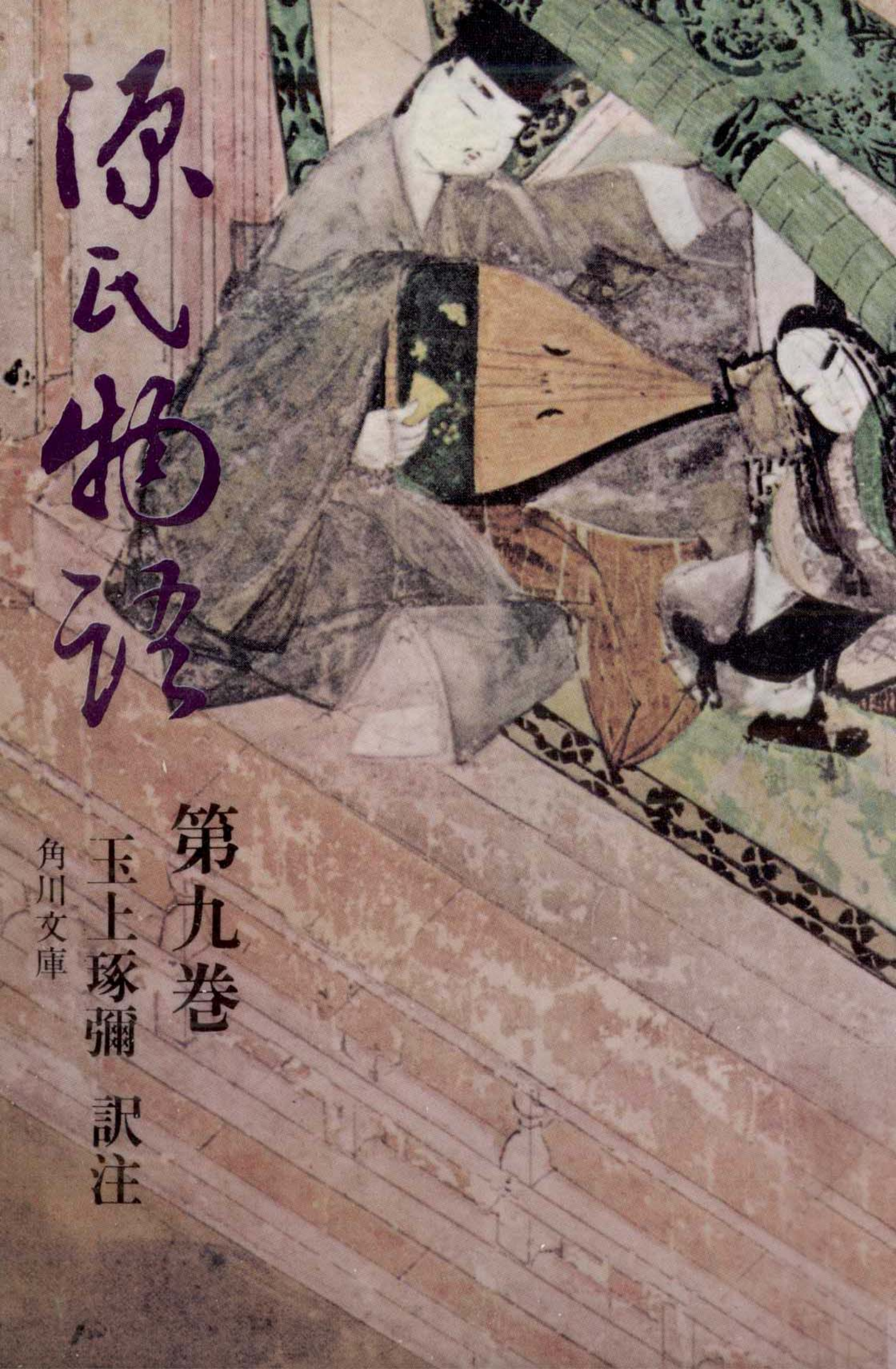
源氏物語

第九卷

玉上琢彌

訳注

角川文庫



源氏物語

第九卷 玉上琢彌

たまがみたくや
玉上琢彌 = 訳注



角川文庫 2215

昭和四十七年七月三十日 初版発行

昭和六十二年七月二十日 八版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—

電話 営業部(〇三)二三八—八五二—

〒一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

源氏物語

付 現代語訳 第九巻

玉上琢彌一訳注



角川文庫 2215

凡 例

一 底本は、定家自筆本の存する巻はこれを用い、存しない巻で明融摸本の存する巻はこれを用い、その他は、池田亀鑑博士の「源氏物語大成」の底本である飛鳥井雅康等筆本を用いる。貴重な典籍の使用を許された所蔵者各位に深謝する。

二 これら底本を改めた場合は、本文の右傍に*印を付し、冊の末に表示する。注意すべき異同は、本文の右傍に*印を付し、脚注欄に異文を掲げ、必要あれば括弧して訳を付した。

三 本文は仮名遣いを正し、適宜に漢字をあて、句読点を付し、会話には「」を付して話者の名を括弧内に小字で記した。作中人物の心を述べた文にも「」を付したことがある。すべて分かりやすくすることを主旨とし、必ずしも統一を計らず、繁雑になることを避けた。また、段落を設け、その要目を脚注欄に掲げた。

四 脚注欄は、段落ごとに要目を掲げ、注意すべき異文を*印を付して掲げたほか、引き歌・故事出典・有職故実などを記し、さらに語義に及んだ。訳文で分かりにくい嫌いのあるばあい、脚注で補うように努めたのである。

五 訳文は、独立して読めるように注意したが、原文から離れすぎないように注意した。読者が原文を味わわれんことを望むからである。

六 既刊の分に収録された巻を参照してほしい場合、この文庫本の頁数をかかげた。

七 文庫本は簡略を旨とするから、原文の美しさ、おもしろさの説明や、時代と背景の説明その他、省略しなければならなかった事が多い。角川書店から全巻にわたり鑑賞を書き試みた「源氏物語評釈」(全十二冊・別巻二冊)を刊行した。合わせ見られれば幸である。

目次

凡例
系図

本文

校本文

現代語訳

早蕨

一九

二〇三

一 春、中の宮の悲しみ（やぶし分かねば、春の光を見給ふにつけても）

一九

二〇三

二 あざりの贈り物（阿闍梨のもとより、年あらたまりては）

一九

二〇三

三 姫宮を思ふ蕨（いとさかりににほひ多くおはする人の）

二〇

二〇四

四 蕨、匂宮を訪う（内宴などものさわがしきころ過ぐして）

二〇

二〇五

五 中の宮、上京の予定（かしこにも、よき若人童など求めて）

二〇

二〇七

六 中の宮、除服（きさらぎのついたちごろとあれば）

二〇

二〇八

七 上京の前日、蕨来訪（みづからは、わたり給はむこと明日とての）

二〇

二〇九

八 蕨、弁の尼と語る（弁ぞ、かやうの御供にも、思ひかけず長き命）

二〇

二一一

九 中の宮と弁の尼の別れ（思はし宜へるさまを語りて、弁は）

二〇

二一二

一〇 中の宮、上京（皆かきはらひ、よろづとりしたゝめて）

二〇

二一四

一一 中の宮、匂宮邸に入る（宵うち過ぎてぞおはし着きたる）

二〇

二一六

- 三 匂宮、中の宮と語る（宮は、日頃になりけるは）
 四 薫の移り香を怪しむ（さても、あさましくたゆめく）
 五 匂宮、中の宮を責める（かばかりにては、のこりありてしもあらじ）
 六 匂宮、中の宮を捨てえず（またの日も、心のどかに大殿ごもり起きて）
 七 薫の反省、中の宮に衣裳を贈る（中納言の君は、かく宮のこもり）
 八 薫の後見ぶり（誰かは、なにごとをも後見かしづき聞こゆる人の）
 九 薫の文、中の宮の悩み（かくて、なほ、いかでうしろやすく）
 十 薫、中の宮を訪う（男君も、しひて、思ひわびて）
 十一 中の宮、女房をそばにおく（いとほのかに、時々物宣ふ御け）はひの
 十二 兩人の応酬（なにごとにつけても、故君の御ことをぞ）
 十三 薫、宇治に姫宮の人形をおく願（外の方をながめいだしたれば）
 十四 中の宮、異母妹のことを言う（年ごろは世にやあらむとも）
 十五 中の宮去り、薫帰る（さりげなくて、かくうるさき心を）
 十六 薫の煩悶（かくのみ思ひてはいかゞすべからむ）
 十七 九月二十日、薫、宇治に行く（宇治の宮を久しく見給はぬ時は）
 十八 あざりに改築を相談（阿闍梨召して、例の、かの御忌日の経仏）
 十九 弁の尼の昔物語（この度ばかりこそ見め、と思して）
 二十 弁の尼に異母妹のことを聞く（さて物のついでに、かの形代の事を）
 二十一 弁の尼に仲介を依頼（くはしく聞きあきらめ給ひて、さらば）
 二十二 朝、帰京に際し、賜わり物（明けぬれば帰り給はむとて）
 二十三 薫より中の宮に文（宮に紅葉奉れ給へれば）
 二十四 匂宮のやきもち（枯れくゝなる前栽の中に、尾花の）
 二十五 匂宮琵琶をひき、中の宮箏を合奏（菊の、まだよくも移ろひはてで）

二四 二五
 二六 二七
 二八 二九
 三〇 三一
 三二 三三
 三四 三五
 三六 三七
 三八 三九
 三九 四〇
 四一 四二
 四三 四四
 四五 四六
 四六 四七
 四七 四八
 四八 四九
 四九 五〇
 五〇 五一
 五一 五二
 五二 五三
 五三 五四
 五四 五五
 五五 五六
 五六 五七
 五七 五八
 五八 五九
 五九 六〇
 六〇 六一
 六一 六二
 六二 六三
 六三 六四
 六四 六五
 六五 六六
 六六 六七
 六七 六八
 六八 六九
 六九 七〇
 七〇 七一
 七一 七二
 七二 七三
 七三 七四
 七四 七五
 七五 七六
 七六 七七
 七七 七八
 七八 七九
 七九 八〇
 八〇 八一
 八一 八二
 八二 八三
 八三 八四
 八四 八五
 八五 八六
 八六 八七
 八七 八八
 八八 八九
 八九 九〇
 九〇 九一
 九一 九二
 九二 九三
 九三 九四
 九四 九五
 九五 九六
 九六 九七
 九七 九八
 九八 九九
 九九 一〇〇

突	夕霧右大臣、迎えに来る（御琴ども教へ奉りなどして）	二六	二六〇
空	中の宮出産の見舞、諸方より（正月つごもりがたより）	二七	二八一
穴	女二の宮の装着の準備（中納言の君は、宮の思しさわぐに劣らず）	二七	二八二
究	薫、権大納言右大將に昇進（二月のついたち頃に、なほしものと）	二八	二八三
古	中の宮、男子を生む、産養（からうじてその晩に、男にて生まれ）	二九	二八三
世	女二の宮の装着、薫と結婚（かくてその月の二十日余りにぞ）	二〇	二八四
世	結婚第三夜（三日の夜は、大蔵卿よりはじめて）	二一	二八五
世	女二の宮を三条の宮に迎える準備（かくてのちは、しのび／＼に）	二二	二八五
世	中の宮の若君の五十日の祝（宮の若君の五十日になり給ふ日教へ）	二三	二八六
世	薫、中の宮と語る（みづからも、例の、宮のおはしまさぬひまに）	二三	二八六
夫	薫、若君を見る（若君をせちにゆかしがり聞こえ給へば）	二三	二八七
老	藤壺で藤の花の宴（夏になれば、三条の宮ふたがる方になりぬべし）	二五	二八八
大	薫、天盃を賜わる（宮の御方より、粉熟まゐらせ給へり）	二六	二八九
夫	按察使の大納言うらやましがる（按察使の大納言は、われこそ）	二六	二九〇
公	歌の披露（紙燭さして歌ども奉る。文台のもとに寄りつゝ）	二七	二九〇
公	御遊び（夜ふくるまゝに、御遊びいとおもしろし）	二八	二九一
公	女二の宮、三条の宮に退出（そのよさりなむ、宮まがでさせ奉り）	二九	二九一
公	薫、宇治にゆき、常陸殿の女を見る（賀茂の祭など、騒がしき程）	二九	二九二
公	すき見（御供の人も、みな狩衣姿にて）	三〇	二九三
公	常陸殿の女のさま（例の御こと。こなたはさき／＼も下ろしこめて）	三一	二九三
公	女房のさま（やう／＼腰痛きまで立ちすくみ給へど）	三一	二九四
公	弁の尼、女に挨拶（尼君は、この殿の御方にも）	三三	二九五
公	薫、女を見る（あはれなりける人かな。かゝりけるものを）	三四	二九六

東屋

允 燕、弁の尼と語る（日暮れもていけば、君もやをら出でて）

二五

二六

一 燕ためらい、母親動かず（筑波山を分け見まほしき御心は）

二七

二九

二 母親、つれ子を愛する（守の子供は、母なかりにけるなど）

二七

二九

三 常陸の守の生活ぶり（守もいやしき人にはあらざりけり）

二六

二八

四 左近の少将と婚約。守は実の娘につくす（この母君、あまたかゝ）

二九

三〇

五 母親、つれ子であることを少将に言う（かくてかの少将、ちぎり）

二八

三〇

六 少将怒る（はじめよりさらに、守のみむすめにあらず）

二八

三〇

七 少将、実の娘との結婚を望む（この人追従あり、うたてある人の）

二八

三〇

八 仲人、守に語る（この人は、妹のこの西の御方にあるたよりに）

二八

三〇

九 守、喜んで実の娘を少将に与える（守、さらに、かゝる御消息）

二八

三〇

一〇 仲人、少将をはめる（よろしげなめりと、うれしく思ふ）

二八

三〇

一一 守の約束（このごろの御徳などの、心もとなからむことは）

二八

三〇

一二 少将喜ぶ（守の言ひつる事を、いともくよげにめでたし）

二七

三〇

一三 母親、結婚の準備。守に破談を聞く（北の方は人知れずいそぎ立）

二六

二八

一四 母親と乳母と嘆く。乳母、燕をすすめる（こなたに渡りて見るに）

二九

三〇

一五 母親の反論。その男性観（あな恐ろしや。人の言ふを聞けば）

二八

三〇

一六 守、実の娘と少将との結婚準備（守はいそぎ立ちて、女房など）

二八

三〇

一七 母親、中の宮に文をおくる（母君、御方の乳母、いとあさましく）

二八

三〇

一八 中の宮、大輔の言に従って、妹を預かる（大輔がもとにも、いと心）

二八

三〇

一九 少将の結婚（守、少将のあつかひを、いかばかりめでたき事をせむ）

二八

三〇

二〇 母子、中の宮邸に行く（この御方さまに、教まへ給ふ人のなきを）

二八

三〇

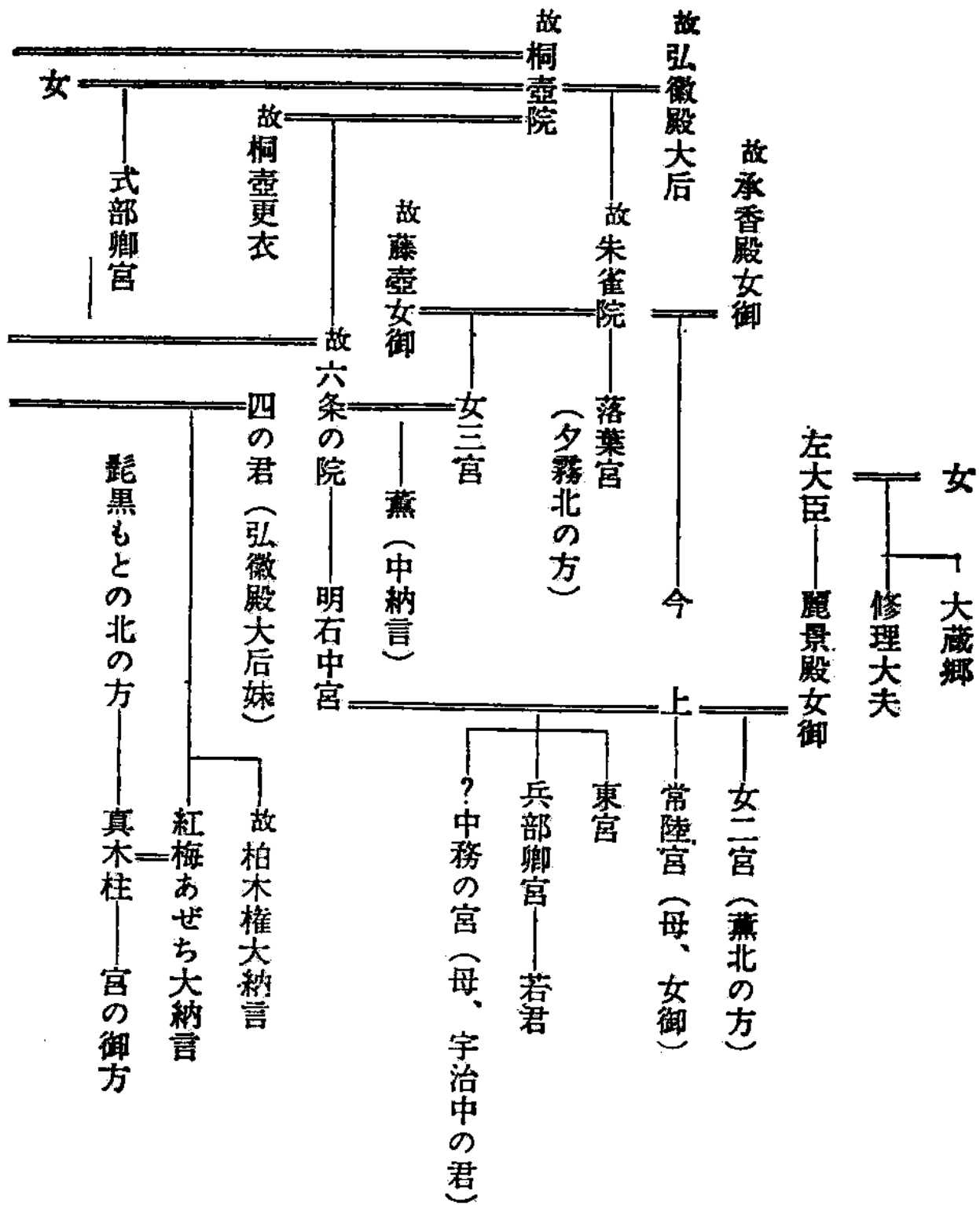
- 三 母親、句宮をすき見する（宮わたりたまふ。ゆかしくて）
 三 母親の心動く（帳の内に入り給ひぬれば、若君は）
 三 句宮邸における少将（宮、日たけて起き給ひて、きさいの宮）
 三 母親、中の宮に句宮をはめる（女君の御前に出で来て）
 三 薫のうわさ話（いさや、やうのものと、人笑はれなる心地せまし）
 三 母親、つれ子の不運を嘆く（こまかにはあらねど、人も聞きけり）
 三 薫、来訪。母親すき見する（かたちも心ざまも、え憎むまじう）
 三 中の宮、薫に妹をすすめる（例の、物語いとなつかしげに）
 三 母親、薫をはめる（さらば、その客人に、かゝる心の願ひ）
 三 中の宮、薫をすすめる（君は、しのびて宜ひつる事を）
 三 早朝に母親は帰る（明けぬれば、車などゐて来て）
 三 句宮帰邸、母親の車を見とがめる（車引きいづる程の少し明う）
 三 句宮、寢殿で来客と日を暮らす（明くるも知らず大殿籠りたるに）
 三 中の宮洗髪、句宮徒然（夕つ方、宮こなたに渡らせ給へれば）
 三 句宮、女を見つける（若君も寝給へりければ、そなたに）
 三 乳母あらわれる（乳母、人げの例ならぬを、あやし、と思ひて）
 三 右近きたる（大殿油は燈籠にて、いま渡らせ給ひなむ）
 三 右近、中の宮に報告（右近、上に、しかくこそおはしませ）
 三 御所より使者、中宮御病氣（上達部あまた参り給へる日にて）
 三 やむなく句宮立ち去る（参りて、御使の申すよりも）
 三 乳母の愚痴（恐しき夢の覚めたる心地して、汗におしひたして）
 三 乳母なぐさめる（君は、たゞ今は、ともかくも思ひめぐらされず）
 三 句宮参内（宮はいそぎで出で給ふなり）

一四四 三四
 一四三 三四
 一四二 三五
 一四一 三六
 一四〇 三六
 一三九 三六
 一三八 三五
 一三七 三七
 一三六 三七
 一三五 三六
 一三四 三七
 一三三 三七
 一三二 三六
 一三一 三六
 一三〇 三六
 一二九 三六
 一二八 三六
 一二七 三六
 一二六 三六
 一二五 三六
 一二四 三六
 一二三 三六
 一二二 三六
 一二一 三六
 一二〇 三六
 一一九 三六
 一一八 三六
 一一七 三六
 一一六 三六
 一一五 三六
 一一四 三六
 一一三 三六
 一一二 三六
 一一一 三六
 一一〇 三六
 一〇九 三六
 一〇八 三六
 一〇七 三六
 一〇六 三六
 一〇五 三六
 一〇四 三六
 一〇三 三六
 一〇二 三六
 一〇一 三六
 一〇〇 三六
 九九 三六
 九八 三六
 九七 三六
 九六 三六
 九五 三六
 九四 三六
 九三 三六
 九二 三六
 九一 三六
 九〇 三六
 八九 三六
 八八 三六
 八七 三六
 八六 三六
 八五 三六
 八四 三六
 八三 三六
 八二 三六
 八一 三六
 八〇 三六
 七九 三六
 七八 三六
 七七 三六
 七六 三六
 七五 三六
 七四 三六
 七三 三六
 七二 三六
 七一 三六
 七〇 三六
 六九 三六
 六八 三六
 六七 三六
 六六 三六
 六五 三六
 六四 三六
 六三 三六
 六二 三六
 六一 三六
 六〇 三六
 五九 三六
 五八 三六
 五七 三六
 五六 三六
 五五 三六
 五四 三六
 五三 三六
 五二 三六
 五一 三六
 五〇 三六
 四九 三六
 四八 三六
 四七 三六
 四六 三六
 四五 三六
 四四 三六
 四三 三六
 四二 三六
 四一 三六
 四〇 三六
 三九 三六
 三八 三六
 三七 三六
 三六 三六
 三五 三六
 三四 三六
 三三 三六
 三二 三六
 三一 三六
 三〇 三六
 二九 三六
 二八 三六
 二七 三六
 二六 三六
 二五 三六
 二四 三六
 二三 三六
 二二 三六
 二一 三六
 二〇 三六
 一九 三六
 一八 三六
 一七 三六
 一六 三六
 一五 三六
 一四 三六
 一三 三六
 一二 三六
 一一 三六
 一〇 三六
 〇九 三六
 〇八 三六
 〇七 三六
 〇六 三六
 〇五 三六
 〇四 三六
 〇三 三六
 〇二 三六
 〇一 三六
 〇〇 三六

- 四 中の宮、妹を呼びよせる（うへ、いとほしく、うたて思ふらむ）
 一五〇
 五 乳母、右近に弁解（この君は、まことに心地も悪しくなりたれど）
 一六一
 六 中の宮なぐさめる（われにもあらず、人の思ふらむことも）
 一六二
 七 中の宮、絵を見せる（絵など取り出でさせて、右近に）
 一六三
 八 姉妹の寝物語、侍女の推測（物語などし給ひて、あかつきがたに）
 一六四
 九 乳母、母親に報告、母親はせつける（めのと、車こひて、常陸殿）
 一六五
 一〇 三条の小家に入る（かやうの方がへ所と思ひて）
 一六六
 一一 母親、少将に歌をよみかける（少将のあつかひを、守は）
 一六七
 一二 母親、薫の求婚を考慮（故宮の御こと聞きたるなめり、と思ふに）
 一六八
 一三 三条のわび住まい（たびの宿りはつれ／＼にて、庭の草も）
 一六九
 一四 薫、宇治の新築を見る（かの大將殿は、例の、秋深くなりゆく頃）
 一七〇
 一五 弁より報告を受け、仲介を命ずる（やり水のほとりなる岩に）
 一七一
 一六 薫、帰京、女二の宮に土産（贈うなれば出で給ふ。下草の）
 一七二
 一七 弁の尼、三条に来る（宜ひしまだつとめて、むつまじく思す）
 一七三
 一八 薫、来訪（宵うち過ぐる程に、宇治より人参れり）
 一七四
 一九 翌朝、宇治にともなり（程もなり明けぬる心地するに、とりなどは）
 一七五
 二〇 道中、姫宮を思う（近き程にや、と思へば、宇治へおはする）
 一七六
 二一 宇治に着く（おはし着きて、あはれ、なき魂ややどりて見給ふらむ）
 一七七
 二二 入道の宮と女二の宮に手紙をおくる（殿は京に御文書き給ふ）
 一七八
 二三 薫、善後処置に苦慮（うちとけたる御有様、今すこしをかしくて）
 一七九
 二四 琴を調べ、女と語る（こゝにありける琴、筆の琴召し出でて）
 一八〇
 二五 弁の尼より菓物と歌（尼君の方よりくだもの参れり、箱の蓋に）
 一八一

索	年	補	校
引	立	注	異

三 二	三 三	一 五	一 〇
--------	--------	--------	--------



あづまや・やどりき・さわらび

